

A-1

ドラヴィダ語族クルフ語・マール語の不定詞の史的再建

小林正人（東京大学大学院人文社会系研究科）

masatok@L.u-tokyo.ac.jp

キーワード：クルフ語、マール語、ドラヴィダ語族、比較言語学、不定詞、アスペクト

要旨

ドラヴィダ語族北東語派のクルフ語とマール語では、クルフ語 $-a:(ge)$ 、マール語 $-o(ti)$ という異なった不定詞接辞が用いられ、その由来が不明であった。クルフ語の不定詞 $-a:(ge)$ は語源上マール語の動名詞 $-e$ に対応し、機能的には $-o(ti)$ に対応する。

$a:$ を含むクルフ語の接辞にマール語で e と o を含む 2 接辞が対応する例は、他にクルフ語の過去分詞接辞 $-ka:$ に対するマール語副動詞接辞 $-ke$ と $-ko$ 、クルフ語の名詞派生接辞 $-pa:$ に対するマール語受動分詞接辞 $-pe$ と動形容詞接辞 $-po$ の 2 組があり、夫々アスペクトで対立する。

クルフ語 $-a:(ge)$ とマール語 $-e$ はドラヴィダ祖語の不定詞 $*-a(n)$ に由来する一方、マール語の $-o(ti)$ はクルフ語で未完了分詞を作る $-o:$ と同源と考えられる。ドラヴィダ語では一般に三人称単数中性形が無標の形で、分詞と同形である場合があり、 $-o(ti)$ と $-o:$ もクルフ語の未来形三人称単数非男性形、マール語クマールバーグ方言に残る接続法三人称単数非男性形と夫々同形である。本稿はこれらがドラヴィダ祖語の三人称非過去接辞 $*-um$ に由来する可能性を指摘する。

§1. 背景

クルフ語とマール語はインド東部で話されるドラヴィダ語族の言語である。パキスタンで話されるブラーフイー語とともに北ドラヴィダ語派と分類されることもあるが、クルフ語とマール語が系統的にきわめて近い一方、両言語がブラーフイー語と共有する特徴は少ないので、発表者は図 1 のように、クルフ語とマール語が北東ドラヴィダ語派 (Northeast Dravidian) という下位区分をなすという立場をとる。本発表ではクルフ語とマール語の不定詞の起源を、現地調査の結果を活用して考察する。

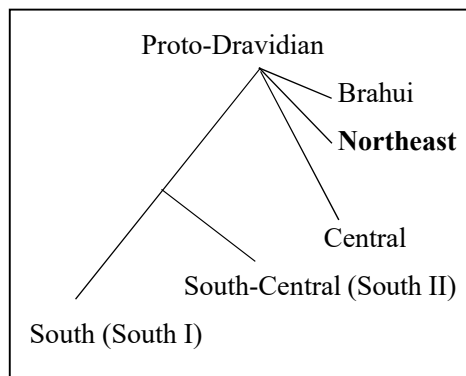


図 1 ドラヴィダ語族の下位区分

§2. 問題

ドラヴィダ語族の言語には不定詞が広く見られる。ドラヴィダ語族言語、たとえばタミル語の不定詞には、英語の to 不定詞と同様「～するために」という目的を表す用法、「～しなければいけない」「～し始める」のように法助動詞の主動詞やコントロール動詞の項となる用法などがある (Andronov 1989:193ff.)。

ともにドラヴィダ語族北東語派に属するクルフ語とマール語は、基礎語彙の半数近くを同源語が占めるなど、近い系統関係にある。両言語とも (1) のように不定詞をもつが、ほかの形態素が規則的な音対応を示す一方で、不定詞の接辞はクルフ語 $-a:ge$ 、マール語 $-oti$ と大きく異なっており、同源ではない。本発表では両言語の不定詞の起源を考察する。

- (1) クルフ xanne:x-a:ge ukky-as {休憩する-INF 座る.過去-3 単.男} 「彼は休憩するために座った」
 マルト qane:g-oti oky-ah {休憩する-INF 座る.過去-3 単.男} (同上)

§3. ドラヴィダ祖語に再建される不定詞 *-a(n) とクルフ語 -a:

形態カテゴリーとしての不定詞は、形は異なるが、ほとんどのドラヴィダ語族言語に見られる。多くのドラヴィダ語族言語には非過去語幹と過去語幹の区別があるが、不定詞は非過去語幹から作られ、不変化である。その用法は言語によって異なるが、法助動詞やコントロール動詞の項となり、言語によっては目的を表す副詞節を作る、動作名詞を作る、願望や命令を表す、否定形の語基となるなどがある。Krishnamurti (2003:341) は娘言語の比較から、不定詞のドラヴィダ祖語形を *-a(n) と再建した。ドラヴィダ祖語形が *-a なら、クルフ語では -a: となると予想される。(2) の例文は、クルフ語の -a: 不定詞の例である。例文 (1) や (2a, b) ではクルフ語の不定詞接辞は -a:ge だが、このうち -ge は与格語尾であり、本来は目的用法を明示する要素であったと考えられる。名詞用法では -a:, -a:ge 両形が用いられ、コントロール動詞の項の場合は -a: が用いられることが多い。

- (2) a. ma:xa:-ba:ri: ka:l-a:ge ilcka: laggi:

夜-とき 行く-INF怖い 感じる 「夜間に出かけるのは怖い」

- b. ne: hu: painca:ci?-a:ge mal gacchrar (Tirkey 2018:119)

誰 も 借金 与える-INF否定 同意した 「誰も金を貸すことに同意しなかった」

- c. xe:r ga b^heṭaṅgon mo:x-a: helra:

鶏 TOP 茄子を 食べる-INF 始めた 「鶏が茄子を食べ始めた」

§4. マルト語の動名詞接辞 -e

クルフ語とマルト語には規則的な音対応が見られ、クルフ語の語末の a: には、マルト語では a または e が対応する：例 クルフ eng-a: 対マルト eṅg-a 「私-与格」、クルフ ta:ka: 対マルト ta:ke 「風」。マルト語の語末の a と e の分布は一様ではなく、すべて a になる方言、すべて e になる方言、a と e が対立する方言があり、どのような条件によって分かれているのか必ずしも明らかでない。

クルフ語の不定詞接辞 -a: に音対応するマルト語の形態素は、副詞的分詞を作る -a と動名詞接辞 -e が考えられるが、前者はクルフ語のやはり副詞的分詞接辞である -a: に対応すると考えられるので、クルフ語の不定詞接辞と同源の形態素は動名詞接辞 -e の可能性が高い：クルフ語 bar?-a: 「来ること、来るために」対 マルト bar-e 「来ること」。

マルト語の動名詞 -e は格接辞がつくなど通常の名詞と似たふるまいをする上に、動作ではなくより具体化した事物を表す場合もある：例 lap-e 「食べること、(葬儀後の) 精進落とし」、eṭw-e 「捧げること、供犠」、cēcj-e 「慈悲を垂れること、慈悲」。クルフ語ではこのような動名詞の用法はインド・アーリア語由来と思われる接辞 -na: が担い、-a: は与格接辞 -ge がつく以外は格接辞をとることはなく、意味も「～すること」より具体化することはない。英語を例に挙げると、マルト語の動名詞は英語の -ing 動名詞に近く、クルフ語の不定詞は英語の to 不定詞に近い機能をもつと言える。

§5. マルト語の不定詞接辞 -oti

マルト語の不定詞は目的用法ではつねに -oti であるが、名詞的用法では -o という短形もある。すなわち bed「欲する」など一部のコントロール動詞は、短形 -o のみを項として取る：例 umbl-o bediö 「小用がしたい」。

またマルト語動詞の現在否定形は -o 形に否定辞 mal と人称語尾がついた形であり、-o だけでも不定詞となることが分かる：例 bar-o-mal-a 「来ない」3 人称単数非男性。さらに副動詞接辞 -ati (例 aṣ-ati 「着いてから」) に -ti という要素が見られることから、不定詞接辞 -oti は短形 -o に、接辞 -ti がついたものと考えられることができる。マルト語に -ti という接辞はないが、クルフ語では道具格・奪格を表す -ti という格接辞があり、同源だとすればクルフ語 -a:ge が与格語尾 -ge を取り込んだように、不定詞 -oti に格接辞が取り込まれている可能性がある。

マルト語の本来の不定詞接辞が -o であるとする、クルフ語の母音 a は語末位置でマルト語の o には対応しないので、クルフ語の不定詞接辞 -a: とは異なる形態素ということになる。

表 1 クルフ語不定詞に対応するマルト語の接辞

	クルフ	マルト
音韻	-a:(ge)	-e
機能	-a:(ge)	-o(ti)

つまり表 1 のように、クルフ語 -a には語源という点ではマルト語の動名詞接辞 -e が対応し、機能の点ではマルト語不定詞接辞 -o が対応するというねじれた一対二の対応が見られる。

§6. クルフ語 a: 対 マルト語 e および o

このようにクルフ語で a: で終わる形態素に対してマルト語で e と o で終わる 2 形態素が機能上対応する場合は他にもある。

クルフ語の過去分詞接辞 -ka: 「～した、された」に対して、マルト語は -ke と -ko の二接辞を持ち、-ke は主語と一致して「～してから」、-ko は「～すると」という副動詞を作る。クルフ語 men 「聞く」：マルト語 men 「聞く」(過去語幹 menj) という動詞を例にとると、例 (3) のような 2 形式がある。

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| (3) クルフ語 | マルト語 |
| 副動詞 menj-ka: 「聞いた、聞かれた」 | 副動詞 menj-keh 「(彼は) 聞いてから」 |
| 過去分詞 menj-ka: 「聞いた、聞かれた」 | 副動詞 menj-ko 「聞くと」 |

またクルフ語で動詞から名詞を作る -pa: という接辞に対して、マルト語では例 (4) のように受動分詞接辞 -pe 「～された」と動形容詞接辞 -po 「～されるべき」の二形式がある。

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| (4) クルフ語 | マルト語 |
| xanj? 「実る」 | conj 「縛る」 |
| 名詞派生形 xanj-pa: 「果物 (実ったもの)」 | 受動分詞 conj-pe 「縛られた」 |
| | 動形容詞 conj-po 「縛られるべき」 |

§7. アスペクトの対立

(3) -ke 「～してから」と -ko 「～すると」、(4) -pe 「～された」と -po 「～されるべき」の二つのペアに共通の対立はあるだろうか。-ke と -ko はそれぞれ過去において確定した状況と過去における条件を表し、-pe と -po はそれぞれ完了した受動と未達成の受動を表すことから、-ke と -ko、-pe と -po は完了対未

完了というアスペクトにおいて対立していると見ることができる。そして動名詞 *-e* と不定詞 *-o* も、それぞれ完結した事態の全体と達成すべき目的を示すという点で、完了と未完了のアスペクトにおいて対立していると考えられる。マルト語ではアスペクトの違いを示す *-e* と *-o* という接辞の対があり、これらは副動詞接辞 *-k* や動形容詞接辞 *-p* と組み合わせたり、アスペクトの違う接辞の対を形成している。

なおこの分析を支持しうる事実として、マルト語には *-k*、*-p* という接辞が実在し、前者は副動詞接辞ではないものの例えば *qa:y* 「乾く」から *qayek* 「乾いた」(Droese 1884: 87) のような形容詞を、後者は *boŋc* 「逃げる」から *boŋcp* 「逃げた」のような形容詞を派生する。

§8. マルト語 *-o* のクルフ語における反映形

マルト語に *-e* と *-o* という接辞の対があることを前節と前々節で主張した。この接辞の対が北東ドラヴィダ祖語(クルフ語とマルト語の祖形)から継承されたと考えた場合、クルフ語にはマルト語 *-e* と音対応する不定詞接辞 *-a:* がある一方、マルト語 *-o* に音対応するクルフ語の形式はないことになる。マルト語には動詞の否定活用や人称の一致を示す副動詞など、改新と見られる文法カテゴリーがあり、*-o* 系列の接辞 *-ko*、*-po* もマルト語内部における改新という可能性はもちろんある。しかしクルフ語とマルト語は§2 で述べたように基礎語彙を多く共有し、ロマンス諸語のように比較的新しく分岐した言語である。マルト語で3対もある接辞 *-e/-o*、*-ke/-ko*、*-pe/-po* のうち、*-o* 系列の接辞の痕跡だけでもクルフ語で見られないものだろうか。

マルト語の語末の *o* は、マルト語とクルフ語の場所格接辞 *-no* vs. *-nu:* のようにクルフ語で *u:* として現れる場合と、*ho* vs. *hō:/hū:* 「～も」のように *o:* として現れる場合がある。クルフ語で *o:* または *u:* で終わる接辞を探したところ、動作主名詞・形容詞を作る接辞 *-u:* (例: *pa:ɾ* 「歌う」→ *pa:ɾu:* 「歌う(人)」)があるが、これにはマルト語では *-u* という同機能の接辞(例: *pa:ɾ* 「歌う」→ *pa:ɾu* 「歌う(人)」)が音対応しており、北東ドラヴィダ祖語に動作主接辞 **-u* として再建できるので、接辞 *-o* とは別物と考えられる。

また、クルフ語には *-o:* という分詞接辞もある。この分詞が接続する名詞は *bi:ri:* 「とき」など限られてはいるが、例 (5) のように未完了の分詞を作る。

(5) *xandrʔ-o: bi:ri:* {眠る-*o:* とき} 「眠るとき」

マルト語の不定詞接辞 *-o* には形容詞用法はないので、クルフ語の未完了分詞接辞 *-o:* とやや機能が異なるが、音形とアスペクトが一致しており、同じ起源と考えることは不自然ではない。以上の議論から、マルト語の動名詞接辞 *-e* とクルフ語の不定詞接辞 *-a:* がともに北東ドラヴィダ祖語の不定詞接辞 **-a* に由来し、マルト語の不定詞接辞 *-o* とクルフ語の未完了分詞 *-o:* が **-o* に由来するという再建が可能である(機能はあとで考察する)。

表 2 同起源の接辞

クルフ語	マルト語	北東ドラヴィダ祖語
不定詞 <i>-a:</i>	動名詞 <i>-e</i>	<i>*-a</i>
未完了分詞 <i>-o:</i>	不定詞 <i>-o</i>	<i>*-o</i>

§9. クルフ語 *-o の起源

§3 節で、ドラヴィダ祖語に *-a(n) という不定詞が再建されることを述べた。不定詞として再建されているのは *-a(n) だけだが、では北東ドラヴィダ祖語に再建した接辞 *-o は何に由来し、どのような機能を持っていたのかを本節で考察する。

例 (5) でクルフ語の未完了分詞接辞 -o: を挙げたが、クルフ語の動詞形態法には -o: という接辞がもう一つある。それは動詞の未来語幹を作る接辞であり、その後には人称接辞をとって未来形を作る。例えば単数形では bar?-「来る」→ bar?-o-n 「私は来るだろう」, bar?-o-y 「君は来るだろう」, bar?-o-s 「彼は来るだろう」, bar?-o: 「彼女・それは来るだろう」などと活用し、最後に挙げた人称接辞のつかない形が単数非男性形（女性+人間以外）である。

未完了分詞 -o: が未来形三人称単数非男性形 -o: と同形であるのは、音変化などで偶然同形になったためかも知れない。しかし中央ドラヴィダ語派のパルジ語でも、-u で作られる三人称単数中性形がそのまま分詞でもあるケースが見られる (Burrow and Bhattacharya 1953: 71)。古典タミル語でも非過去三人称中性単数形と未完了分詞の両方に -(kk)um が用いられる。クルフ語においても、定動詞の無標の形である三人称中性（=非男性）と同形の、人称語尾がつく前の未来語幹が、未完了分詞となったと考えられる。

§10. マルト語 -o の起源

マルト語の未来形は表 3 のように -e（方言によっては -a）を含む接辞で形成されている。-e はクルフ語の未来形 -o: とは音対応しないので、「不定詞 -o は未来語幹に由来する」という説明はマルト語には当てはまらない。ではマルト語の不定詞 -o の起源はマルト語内部には辿れないだろうか。

表 3 クルフ語とマルト語の未来形（単数のみ）

クルフ語	マルト語
bar?-on 1 単	bar-en, -an 1 単
bar?-oy 2 単	bar-ene 2 単.男性
bar?-os 3 単.男性	bar-eh 3 単.男性
bar?-o: 3 単.非男性	bar-eni 3 単.非男性

マルト語という時、通常は北部のサウリア・パハリアという支族の方言を指すが、マルト語は地域差の大きい言語であり、話者コミュニティ内にも3つの支族がある。方言境界はまだ確定できていないが、Kobayashi (2012) ではサウリア・パハリアの話す北方言、サウリア・パハリアとマル・パハリアが話す西方言および中央方言、そしてマル・パハリアとクマールバーグ・パハリアが話す南方言という大きな区別を立てた。各方言にも地域、支族によって差異があるが、詳細は明らかでない。

マルト語南部方言のうち、クマールバーグ・パハリア支族の住む村 Paderkola B (Pakur District, Jharkhand) に、表 4 の左列のように接辞 -o によって作る接続法があり、仮定や反実仮想を表すことを発見した。

表 4 マルト語の -o 接続法 (単数のみ)

Paderkola B	Droese 1884
bar-o-n-nu 1 単	bar-o-n 1 単
bar-o-y-nu 2 単	bar-o 2 単
bar-o-h-nu 3 単.男	bar-o-h 3 単.男
bar-o:-0-nu 3 単.非男	bar-o-ð 3 単.非男

-o 接続法は他の地点のマルト語では確認できないが、一世紀以上前に Droese が北西方言を記述した中に optative として記述しているものとおそらく同一であり、かつてはマルト語に広く存在したパラダイムと考えられる (Droese 1884: 48)。音対応および接続法と未来形という機能上の類似から、北東ドラヴィダ祖語に *-o という接辞があったと推定される。

クルフ語の -o 未来は時制として現在、過去と鼎立しているが、時制以外にも (6) のように可能、推量などのモダリティや未完了アスペクトを表す用法があり、元はモダリティを表していた可能性がある (Kobayashi & Tirkey 2017: 250)。

(6) ne: engdas ra?-os je: bar?-a:lagdas {誰 わが息子 ある-未来.三単男 REL 来-ている}

(息子を殺したつもりの老婆が、帰ってきた息子に)「帰ったって、誰がうちの息子のはずがあるか？」

ドラヴィダ祖語にも過去および非過去という二つの時制しか再建されず、マルト語の -o 接辞がモダリティを表すことから、クルフ語の -o 未来が北東ドラヴィダ祖語に由来するとしても、その元来の機能は時制ではなくモダリティまたはアスペクトであったと考えられる。クルフ語の未来形とマルト語の接続法から北東ドラヴィダ祖語 *-o を再建すると、その機能は推量や仮定、未完了相の表示であっただろう。

§11. 北東ドラヴィダ祖語における *-o

北東ドラヴィダ祖語に再建される *-o は、ドラヴィダ祖語まで遡ることができるだろうか。*-o と音形・機能が類似した接辞では、ドラヴィダ祖語に非過去接辞 *-um が再建されており (Krishnamurti 2003:305)、*-o は*-um に由来する可能性がある。ドラヴィダ祖語の *u はクルフ語とマルト語で通常 u で反映されるが、*u > o という例も *um 「～も」 > マルト ho, クルフ hō:/ hū: や *uŋ 「飲む」 > マルト o:n, クルフ on などに見られ、また語末の *m がクルフ語、マルト語で消失する例も上記 *-um や、Paderkola B 村のマルト語方言における副動詞 1 人称複数排除形短形 -a < *-am などに見られる。したがって音韻変化としては北東ドラヴィダ祖語 *-o がドラヴィダ祖語 *-um に由来すると考えることは不可能ではない。

§12. まとめ

ドラヴィダ祖語の *-a(n) 不定詞接辞は、北東ドラヴィダ語派でも不定詞接辞 *-a として継承され、クルフ語の不定詞接辞 -a: へと発展した。*-a はマルト語で名詞的用法に特化した動名詞接辞 -e となる一方、推量などを表す北東ドラヴィダ祖語の接辞 *-o と格接辞 *-ti から、マルト語の不定詞接辞 -oti

が発達した。一方クルフ語では *-a(n) 不定詞はそのまま不定詞として、*-o は未来形と未完了分詞の接辞として継承された。北東ドラヴィダ祖語の接辞 *-o は、ドラヴィダ祖語に再建される非過去接辞 *-um に遡る可能性がある。

音素表

クルフ語: aeiou とその長音と鼻音、k k^h c c^h [t^h t t^h p p^h g g^h j j^h d d^h d d^h b b^h ŋ ŋ n n m s h x y[j] ?

マルト語: aeiou とその長音と鼻音、q-ʔ k c [t p ɠ g j d d b ŋ n ŋ n m s h y w ɔ̃

略号

1: 一人称; 2: 二人称; 3: 三人称; INF: infinitive; 単: 単数; 男: 男性; REL: relative; TOP: topic

謝辞

本発表は科学研究費補助金（基盤 C 18K00524）による成果である。

参考文献

- Andronov, Mikhail S. 1989. *A Grammar of Modern and Classical Tamil*. Madras: New Century Book House.
- Burrow, Thomas and Sudhibhushan Bhattacharya. 1953. *The Parji Language*. Hertford: Stephen Austin and Sons.
- Droese, Ernest. 1884. *Introduction to the Malto Language*. Agra: Secundra Orphanage Press.
- Kobayashi, Masato. 2012. *Texts and Grammar of Malto*. Vizianagaram: Kotoba.
- Kobayashi, Masato and Bablu Tirkey. 2017. *The Kurux Language: Grammar, Texts and Lexicon*. Leiden: Brill.
- Krishnamurti, Bhadriraju. 2003. *The Dravidian Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tirkey, Bablu. 2018. *Khattrka Ropnas gahi Tungul*. Bendora: Manas Prakashan Bendora.